

## ローマ人へ手紙11章1-15節 「見捨てていないイスラエル」

### 1A 恵みによる選び 1-10

#### 1B 残された者 1-6

#### 2B 頑なにされた者 7-10

### 2A 失敗による救い 1-15

#### 本文

私たちは、9章から神の義についての問題を取り扱っています。それは、神の祝福はまずイスラエルに及ぶはずなのに、大体にして異邦人がその祝福を受けていることについての問題です。パウロは、その理由を9章と10章において説明しました。9章において、パウロは、神の選びがあるからだと説明しました。イスラエルのすべてが選ばれているのではなく、残された者だけがイエスをメシヤとして信じている、というものです。けれども、10章においては、イスラエルが信仰による義についての知識がなかったからであると、説明しています。神の義に聞き従うべきなのに、自分自身の義を立てようとしたところに問題がありました。

このようにパウロは説明しているのですが、だからといって満足しているわけではありません。イスラエルが福音に敵対していることには変わりなく、そのことで心を痛めているのです。けれども、11章において、神の不思議なご計画の中で、イスラエルは必ず救われることをパウロは預言しています。子とされること、栄光、礼拝、契約、律法、約束、先祖、そしてキリストご自身も、イスラエルのものなのですが、これらをすべて、将来において手にすることができるとパウロはいます。ですから、11章はイスラエルの回復です。

### 1A 恵みによる選び 1-10

#### 1B 残された者 1-6

1 すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。

11章は、「神は決してイスラエルの民を退けておられるのではでない。」という断言から始まっています。パウロは、他の個所においても、「絶対にそんなことはない。」という言葉を使っていましたね。例えば、「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。絶対にそんなことはありません。(6:1-2)」と言いました。同じように、イスラエルの民が絶対に決して見捨てられていないのです。

パウロの宣べ伝える福音について、人々が陥りやすい間違いがあるので、パウロは「絶対にそんなことはありません」と言ってそれを完全否定して、その過ちを正し、教えています。つまり、イス

ラエルについて、私たちキリスト教会も同じ過ちを犯してしまいがちということです。それは何かと言いますと、「旧約聖書は、イスラエルの民に対してのものである。そして新約が与えられ、全ての人々に福音が届けられた。だから、旧約聖書は私たちにそれほど関係がない。今、新約聖書が大事であって、イエス・キリストと自分との関係が大事なのだ。」という考えです。そこに、イスラエルのことは眼中にないし、念頭にありません。古代の民であり、神に選ばれたかもしれないが、今は関わりがないということです。これが、多分にキリスト教会にあります。そして神学体系にさえなっています。「イエスにあってイスラエルは成就した。だから今のイスラエル民族は、特に選びの民ではない。」という神学です。これはしばしば「置換神学」とも呼ばれています。「教会がイスラエルに置き換えられたのだ」とする神学です。しかし、それについてパウロは明確に、「絶対にそんなことはありません。」と言っているのです。

こここのころの聖書全体の把握はとても大事なものです。私たちはしばしば、「木を見て、森を見ず」というところで過ちを犯します。旧約聖書と新約聖書のつながりを見ません。私たちの使っているDBCの建物、三階は、私たちのための二つの教室の間の仕切りを取り外せるようになっていません。週末になれば、私たち教会がそれを取り外し、一つの部屋として使います。旧約と新約はそのようなものであり、本質は一つなのですが、キリストが来られたということによる仕切りがあるだけで、同じ一つの書物なのです。そのつながりを、聖書のごく一部だけを見て、自分の思いや気持ちでいつの間にか、旧約と新約の神を切り離して、聖書の神ではない神を思っているという過ちを犯しています。

そこでパウロは、その過ちを直しています。まず、「この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。」と言って、自分のことを取り上げています。系図の定かでないユダヤ人ではなく、確かにペットというなら血統書のあるような、生粋のイスラエル人です。このイスラエル人がイエスをメシヤとして信じている、ということ自体が、イスラエルの民を神が退けていないことを証明する一つの根拠です。これからパウロは、「残された民」について話します。多くのイスラエルの民が神から離れていた時でさえ、神はイスラエルへの選びが確かであることを示すために、神の前にへりくだる一部の民を残されている、という原則また歴史があります。残された民がいるということは、すなわち民全体を回復させる意図を神が今も持っておられるということを示しているのです。ノアの家族を残された時もそうでした、主はご自分が人を造られたことを悔やまれましたが、それでも全て滅ぼすのではなく、ノアの家族八人を残して、それで彼らから人を増やしました。アブラハムに大いなる国になると約束を与えられた神は、ご自分の約束を民の一部を残して、後に実現されるのです。

2a 神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません。

神が初めにイスラエルを選ばれたとき、神は終わりの時までをすべて知っておられて選ばれました。イスラエルが事実、神の民となることを見据えて、彼らを選ばれたのです。このことばが、8章

においても使われていたことを思い出してください。「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。(8:29)」私たちが予め神に知られていて、それで私たちが御子と同じ姿に変えられる、栄光の姿に変えられることを主は定められました。この神の恵みによる選びがあるからこそ、今の自分でいられるわけです。ペテロも第一の手紙で、こう話しました。「父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。どうか、恵みと平安が、あなたがたの上にもますます豊かにされますように。(1:2)」

したがって、イスラエルに対する神の選びについて、もし今は異邦人が信じて、キリスト教があるから、彼らに対する選びは無くなったのだとするのならば、神の予知、予め知っておられるというご性質を否定することになります。そしてそれは、私たちが神が選ばれたということに直接関わります。イスラエルを今、見捨てられているのなら、私たちが途中で神が放棄することもあり得るということになるのです。ですから、神の予知と選びを知っているものであれば、今、多くが心を頑なにしているイスラエル人を見ても、彼らが選びの民なのだということを認めるはずです。そして、その選びの中に異邦人であるけれども、キリストによって招き入れられたのだ、だから神の自分に対する選びも確かなのだ、と確認することができるのです。

エレミヤは、31 章で新しい契約がイスラエルの家とユダの家に神が結ばれることを話されました。そして、こういわれます。「主はこう仰せられる。主は太陽を与えて昼間の光とし、月と星を定めて夜の光とし、海をかき立てて波を騒がせる方、その名は万軍の主。「もし、これらの定めがわたしの前から取り去られるなら、..主の御告げ。..イスラエルの子孫も、絶え、いつまでもわたしの前で、一つの民をなすことはできない。」(31:35-36)」もし、太陽系や銀河系が爆破していたら、また海がすべて渴ききっていたら、イスラエルと神との契約は無効になっていると言えるでしょう。けれども、太陽や月や星がいつものように運行しているかぎり、また、海に波があるかぎり、イスラエルへの約束は決して途絶えることはありません。

2b それともあなたがたは、聖書がエリヤに関する個所で言っていることを、知らないのですか。彼はイスラエルを神に訴えてこう言いました。3「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこわし、私だけが残されました。彼らはいま私のいのちを取ろうとしています。」4 ところが彼に対して何とお答えになりましたか。「バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある。」

パウロは徹底して、聖書から論じています。自分がイスラエル人でイエス様を信じていることを話してから、聖書の人物、エリヤを挙げています。思い出してください、エリヤはバアルの預言者と対決して、勝利を収めたあと、彼らを殺しました。そのことがイザベルの耳に入って、彼女がエリヤを殺すと脅しました。そこで彼は逃げに逃げたのです。主がエリヤに声をかけられて、「あなたは何をしているのか。」と聞かれたとき、エリヤは、「私だけが残されました！」と叫びました。ところが、

事実はそうではありませんでした。列王記第一 18 章には、アハブの側近に主を恐れるオバデヤがいました。そして彼は、百人の主の預言者を匿っていたことが書かれています。そして、主がシナイ山において、エリヤには七千人を残していると言われたのです。

エレミヤは、「神に訴えて」言ったと言っています。これは、イスラエルの民が神に背いているから、彼らが滅んでしまて構わないということを言外で語っているような言葉です。神に選ばれた者を訴えるのは誰か、とローマ 8 章に書かれていましたが、そのようなことをエリヤはやってしまったのです。イスラエルがどれだけ背いても、主は彼らを予め知っておられて、それで選んでおられました。そして選んでおられることを示すために、七千人もの男を残しておられたのです。

5 それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者がいます。6 もし恵みによるのであれば、もはや行ないによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。

神はイスラエルの民を、その国民として見捨てておられません。選んでおられます。11 章を最後まで読むと、異邦人の救いの完成の後に、主はイスラエルを国民としてお救いになります。その選びにいながらにして、神を拒んだイスラエル人は多々あります。バアルにひざをかかめた人々が大勢いましたが、彼らはイスラエル人として滅びに至りました。そしてイエス様の時代のユダヤ人にも、この方を拒んだので死んで、滅びに至った人々がいます。国民に対する選びが、個々の救いの確証とはなっていません。しかし、主は彼らに対していつも救いの手を伸ばしておられます。

そして主は、ユダヤ人たちの中から恵みによって選び、救われた者たちがいるということです。それが残された者たちです。そして、彼が恵みによるのであり、行ないによるのではないことをことさらに強調しています。私たちは行ないによって、何らかの形で救いの条件を付けたいと願うアダムから引き継いでいる性質があります。禁じられた実を食べたら、自分の手でいちじくの葉を綴り合せて、恥を覆おうとしました。けれども、選びは神の恵みのみで行われます。パウロはこのことを実感していました。「2テモテ 1:9a 神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。」

私たちは選び、また残された者という言葉が聞くと、それは、何か殊更に努力をしたからだ、と思ってしまう。どこかで自分が努力したから、それで残っているのだ。多くの人が信仰から離れたけれども、自分たちは努力したから今もここにいるのだ、と思ってしまうのです。けれども、そうではない、とパウロは断言します。神の恵みなのです。行ないとは別に神の恵みによって、選ばれたことを知っているからこそ、なおのこと信仰に留まっているのです。パウロは、自分の働きについてこう話しています。「1コリント 15:9-10 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」

もちろん、私たちの努力は必要です。しかし、それは既に神が恵みによって既に選ばれたことを確かにするものであって、選ばれるために努力するものではありません。「2ペテロ 1:10-11 ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたことを確かなものとしなさい。これらのことを行なっていれば、つまりことなど決してありません。このようにあなたがたは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国にはいる恵みを豊かに加えられるのです。」

## 2B 頑なにされた者 7-10

7 では、どうなるのでしょうか。イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでした。選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです。

パウロは、残された者たちについて語りましたが、その他の多くのユダヤ人について語り始めます。彼らについて、「追い求めていたものを獲得できませんでした」と言っています。パウロはこのことを既に9章31-32節で話しています。「しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした。なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行ないによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。」これは皮肉ですが、事実であります。追い求めていない者が義を獲得し、追い求めていた者が獲得できませんでした。それは自分自身の行ないによるかのように義を求めたからです。

しかし、ここ7節ではパウロが9章で語っていたことに焦点を合わせています。つまり、「主はあわれむ者をあわれみ、そして頑なにする者を頑なにする」という主権の働きです。「選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです。」ということです。そしてパウロは、聖書からイスラエルの民が頑なにされることを言及している箇所を二つ取り上げります。

8 こう書かれているとおりです。「神は、彼らに鈍い心と見えない目と聞こえない耳を与えられた。今日に至るまで。」

この初めの箇所は、二つの聖書箇所が意識されていると言われます。一つは申命記29章4節、もう一つはイザヤ書6章10節です。ただイザヤ書には、数多くこの言いまわしがあり、29章にも書かれています。そこに、心が鈍くなること、目が見えなくなっていることについての詳しい説明があります。

29:10 主が、あなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、あなたがたの目、預言者たちを閉じ、あなたがたの頭、先見者たちをおおわれたから。11 そこで、あなたがたにとっては、すべての幻が、封じられた書物のことばのようになった。これを、読み書きのできる人に渡して、「どうぞ、これを読んでください。」と言っても、「これは、封じられているから読めない。」と言い、12 また、その書物を、読み書きのできない人に渡して、「どうぞ、これを読んでください。」と言っ

ても、「私は、読み書きができない。」と答えよう。

13 そこで主は仰せられた。「この民は口先で近づき、くちびるでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれてのことにすぎない。14 それゆえ、見よ、わたしはこの民に再び不思議なこと、驚き怪しむべきことをする。この民の知恵ある者の知恵は滅び、悟りある者の悟りは隠される。」

15 ああ。主に自分のはかりごとを深く隠す者たち。彼らはやみの中で事を行ない、そして言う。「だれが、私たちを見ていよう。だれが、私たちを知っていよう。」と。16 ああ、あなたがたは、物をさかさに考えている。陶器師を粘土と同じにみなしてよかろうか。造られた者が、それを造った者に、「彼は私を造らなかった。」と言い、陶器が陶器師に、「彼はわからずやだ。」と言えようか。

17 もうしばらくすれば、確かに、レバノンには果樹園に変わり、果樹園は森とみなされるようになる。18 その日、耳しいた者が書物のことばを聞き、盲人の目が暗黒とやみの中から物を見る。19 へりくだる者は主によっていよいよ喜び、貧しい人はイスラエルの聖なる方によって楽しむ。

ここには、「偽善」が鈍くさせる原因であることが分かります。御言葉に対する敏感さがなくなり、それで儀式的に口は動かしているのですが、心がそこに伴っていません。そして心では隠れた動機、悪いことがあります。それは放置されています。しかし、主が恵みによって、へりくだる者、貧しい者にご自分の知識を知らせてくださいます。このへりくだりが重要です。

9 ダビデもこう言います。「彼らの食卓は、彼らにとってわなとなり、網となり、つまずきとなり、報いとなれ。10 その目はくらんで見えなくなり、その背はいつまでもかがんでおれ。」

こちらは詩篇 69 篇からの引用です。ここでの問題は、「メシヤを受け入れなかったこと」であります。イエス様を裏切り、見捨てて呪われることを預言しているのが、69 篇です。全体を読むとよいのですが、長いので 19 節から 23 節までを読みます。「あなたは私へのそしりと、私の恥と私への侮辱とをご存じです。私に敵対する者はみな、あなたの御前にいます。そしりが私の心を打ち砕き、私は、ひどく病んでいます。私は同情者を待ち望みましたが、ひとりもいません。慰める者を待ち望みましたが、見つけることはできませんでした。彼らは私の食物の代わりに、苦味を与え、私が渴いたときには酢を飲ませました。彼らの前の食卓はわなとなれ。彼らが栄えるときには、それが落とし穴となれ。彼らの目は暗くなって、見えなくなれ。彼らの腰をいつもよろけさせてください。」21 節は、イエス様が十字架で受けた仕打ちです。そして 22 節、ここでも引用されているのはイスカリオテのユダのことを話しているのでしょう。最後の晩餐で、彼はイエスを裏切ることを心の中で決めていました。

## 2A 失敗による救い 11-15

そして 11 節から、大きな箇所に入ります。それは、「イスラエルが福音を拒んだことによって、異邦人に救いが及んだ」ということです。その失敗を神が異邦人にとっての霊的な富にしてくださった、ということです。そして今度は、主は、イスラエル自身をも救われるということです。

11 では、尋ねましょう。彼らがつまずいたのは倒れるためなのでしょう。絶対にそんなことはありません。かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです。

再び、「絶対にそんなことはありません。」であります。確かに、彼らがつまずきました。しかし、それは倒れたことを意味しません。躓いたけれども、倒れなかったのです。ここから、再び主ご自身の主権の領域に入ります。主は、たとえ人々が失敗しても、その失敗をさえ用いられて栄光にされるということです。否定的なこと、悪をさえご自分の御心の中で益にしておられるという領域です。そこには、主の真実があります。主が必ずご自分の言われたことを成し遂げるために、時にそれが頓挫しているように見えることさえ、ご自分の計画を実行するために用いておられます。

ユダヤ人の多くがイエス様を拒み、パウロの宣教も拒みました。イエス様は、地上におられたとき、ご自分を王子にたとえられてこのことを説明なさいました。王は招いた者たちが来ないので、招いていなかった、大通りにいる人たちを片っ端から集めて、祝宴を行なわれたと話されました(マタイ 22:1-14)。そして、初めは「失われたイスラエルの羊」を捜しておられて、それから「全ての国民を弟子としなさい」と命じられました。そして、パウロもユダヤ人が救われることを願って伝道して、それで彼らが拒んで、異邦人に福音が届くという順序を経ていきます。ピシデヤのアンテオケにおいて、「使徒 13:44-48 次の安息日には、ほとんど町中の人々が、神のことばを聞きに集まって来た。しかし、この群衆を見たユダヤ人たちは、ねたみに燃え、パウロの話に反対して、口ぎたなくののしった。そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。なぜなら、主は私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを立てて、異邦人の光とした。あなたが地の果てまでも救いをもたらすためである。』」異邦人たちは、それを聞いて喜び、主のみことばを賛美した。そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰にはいった。」その他、コリントでも、ローマでも起こりました(18:5-8 ,28:23-29)。

このことによって、大きな目的が実はありました。それはユダヤ人が妬んで、それで彼らが神を求めるようにするためなのです。「申命記 32:21 彼らは、神でないもので、わたしのねたみを引き起こし、彼らのむなしいもので、わたしの怒りを燃えさせた。わたしも、民ではないもので、彼らのねたみを引き起こし、愚かな国民で、彼らの怒りを燃えさせよう。」ですから、神がユダヤ人を退けたのではなく、むしろ国民ではないもので、妬みを引き起こして、それで彼らは何とかして救われる

ように願っているのです。

12 もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう。

このパウロの論法は、ローマ人への手紙をはじめ、いろいろなところで使われていましたね。「もし～であれば、なおさらのこと」という言い回しです。例えば、「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。(5:9)」とパウロは言いました。イスラエルが福音を拒んだことによって、世界中の異邦人に福音が言い広められる結果となりました。彼らが拒んでいるときさえ、そのようなすばらしい結果がもたらされているのです。それではなおさらのこと、イスラエルが回復するときは、さらにすばらしいことが起こります。

これまで、異邦人の多勢が救いに導かれました。これはとても喜ばしいことです。けれども、これをはるかに越えた、とてつもない祝福が将来に備えられています。それはイスラエルの完成です。彼らが国民的にイエスさまを信じます。イスラエル人は約束の土地を相続します。イエスさまがエルサレムに世界を支配されているので、世界には、正義と平和で満ちあふれます。そして、回復されたイスラエルを中心とする神の国に、私たち異邦人クリスチャンも加わることができるのです。

13 そこで、異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています。14 そして、それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです。

パウロは、読者を異邦人信者にしぼっています。私たちも異邦人ですが、ここからは私たちに直接的に語られています。まずパウロは、自分が異邦人の使徒であると言い、その務めを重んじていると言っています。けれども、ユダヤ人の救いも願っています。つまり、パウロは、異邦人である私たちも、イスラエルの救いを願わなければいけないことを示唆しているのです。異邦人の不信者が救われることを願うと同時に、イスラエルが救われることが神の御心です。

15 もし彼らの捨てられることが世界の和解であるとしたら、彼らの受け入れられることは、死者の中から生き返ることではなくて何でしょう。

イスラエルが救われることを願うのは、死者の中から人が生き返るような出来事であります。けれども、それが確実に起こりますよ、とパウロは言っています。エゼキエル 37 章には、干からびた骨が谷の中に眠っている幻があります。そこに主がエゼキエルに、生き返るように命令するよう命じられました。すると、肉ができ、最後は息を与えられました。それがイスラエルとユダの家だと主は言われます。